小瀬川の恵みと人の技

大竹手すき和紙

問い合わせ　生涯学習課 ☎㊸5800

日本で古来より生産されてきた和紙は、柔らかで強く、保存性にも優れた紙です。現在、伝統的な手すきにより和紙を生産している地域は、全国的に少なくなっています。広島県内では大竹だけで、400年の伝統の製法が今に受け継がれています。

和紙づくりに適した風土

広島県と山口県の県境を流れる小瀬川は、水量が豊富で水質も良く、また、大竹市の気候は、和紙の原料である楮（こうぞ）の生育に適していました。このようなことから、小瀬川流域では400年前から手すき和紙の生産が始まったと伝えられています。

大竹和紙の最盛期

廃藩置県後に和紙の生産と販売が自由になると、技術の改良、品質の改善、生産能率の向上などが図られました。これらの改良技術の導入に加え、文化の発達などに伴う需要の増加もあり、最盛期の大正8年には市内に約1、000軒もの和紙職人の家がありました。

しかし、第一次世界大戦後西洋紙の利用が進み、障子に替わるガラス戸の普及などもあり、需要が減退しました。さらに、第二次世界大戦後には和紙の生産も機械化が進み、手すき和紙生産はどんどん減少していきました。

和紙を未来に残す

生産者の減少には歯止めがかからず、県内で手すき和紙を生産する家は、ついに大竹市に残る1軒のみとなりました。そして、昭和63年には最後の手すき和紙生産者も高齢により廃業しました。

しかし、廃業したのと同じ年に、「伝統技術を絶やしてはいけない」という思いから、かつて手すき和紙生産に関わっていた数人で、「おおたけ手すき和紙保存会」を立ち上げました。保存会では学生への体験活動や、初心者を対象とした技術伝承者養成の講習を開くなど、先人の工夫と努力により生み出された技術を、次世代に継承する活動を行ってきました。

高い技術が必要な紙すき作業。

現在も、手すき歴10年目となるすき子2人で、こいのぼり用の紙、障子紙、ふすま紙、神楽の面紙、書道用紙など、さまざまな紙を年間3、500枚すきあげています。防鹿にある「大竹手すき和紙の里」では、和紙の原料作りからすき上げ、乾燥までの一連の製造作業の見学、はがきや色紙作りの体験も行っています。

手すき和紙を使って

さまざまな商品が並ぶ大竹和紙工房。

いつの頃からか定かではありませんが、大竹では和紙を利用したこいのぼり作りが盛んに行われてきました。こいのぼりは、江戸時代中期の裕福な庶民の家庭で始まった習慣で、武家ののぼり旗に対抗し、男児の立身出世を願って、吹流しを滝にみたて、鯉ののぼりを上げるようになったものだそうです。和紙のこいのぼりは、風を切るときの「バサバサッ」という豪快な音に迫力があり、他のものでは味わえない趣があります。

また、1月に開催される書初め大会や凧作り教室でも、手すき和紙が使用されています。

大竹駅前のスペイン通りにある和紙工房では、和紙を利用したさまざまな製品を販売しています。

展示会を開催

展示会では、大竹伝統の手すき和紙ができるまでの製造工程や材料の紹介コーナーを設けます。その大竹手すき和紙を使った手描きこいのぼりの展示も行います。この鯉のぼりは、唯一の描き手である大石雅子さん（元町4）が作成したもので、5mの迫力ある大型こいのぼりや、さまざまな大きさのこいのぼりを展示します。

とき　4月10日㈬～5月7日㈫
ところ　総合市民会館ロビー

こいのぼりを制作する大石さん。

「手描きこいのぼり」を描いてみよう

小学生以下の方でも手軽に作成できるよう、60㎝の鯉のぼりを新企画しました。中学生以上の方は1・5m、または1・2mのこいのぼりを作成します。

とき・対象・参加料
4月20日㈯
○小学生以下（3年生以下は保護者同伴）
9時30分～12時
60㎝の鯉　500円
○中学生以上
13時30分～16時
1・2mの鯉　2、200円
1・5mの鯉　2、500円

ところ
ギャラリーおおたけ

定員
午前・午後20人ずつ（先着順）

講師
大石雅子さん

持参品
エプロンなど汚れても良い服装。小学生以下は色をつけるために必要な、絵の具やクレヨン、マジックなど。

申し込み
4月17日㈬までに直接、または電話で生涯学習課へ。